

「辞書形」を基本形とする動詞分別法の導入について —学習者にやさしい動詞の導入方法を考える—

高 恩淑

On the verb distinction based on the dictionary form : Considering a learner-friendly way of verb introduction

KO Eunsook

While learning Japanese at the beginner level, it is common for the introduction of verbs to involve the “masu form” (polite form of verbs). However, if the “masu form” is learned first as the basic form, it is expected that the conjugated form will be difficult to use because the verbs can't be classified properly.

This paper attempts to review the method of introducing verbs with the “masu form” as the basic form in elementary Japanese level, and to discuss the advantages of introducing the “dictionary form” as the basic form, referring to the findings of previous studies.

It's considered that if the “masu form” is introduced as the basic form, the acquisition of the “dictionary form” will be delayed and the verb conjugation forms will be more difficult to learn. However, if the “dictionary form” is used as the basic form, the discrimination of verb categories and conjugation forms will be easier to master.

The discussion in this paper suggests the advantages of verb conjugation forms that use the “dictionary form” as their basic form, and proposes new verb classifications that differ from traditional verb classifications.

Keywords : dictionary form, masu-form, verb distinction, verb conjugation,
order of verb introduction

1. はじめに

初級日本語教育において動詞の導入は、「マス形（動詞の丁寧形）」から始めるのが当たり前になっている。その理由としてまず考えられるのは、学習者が日本語を使う場面において話し相手に失礼にならないよう、または話し相手に不快感を与えないように丁寧な言葉を先に教える必要があるからであろう。学習者の立場から見ても、名詞や形容詞のデス形と合わせて動詞の「マス形」を先に身に付け、丁寧な話し方ができた方が仕事上だけでなく、日常の会話においても役に立つのだろう。しかし、丁寧体（「デスマス体」）が使えるように指導することと、動詞を導入する際に「マス形」を基本形とすることは別の問題である。

動詞文の導入は「マス形」で行われても（教科書の例文に「辞書形」が使われなくても）、語彙リストなどで動詞の「辞書形」を提示した方が動詞のグループ分け¹や基本的な活用形、例えば、テ形、タイ形、ナイ形、などの習得に役立つと考えられる²。従来の初級日本語教科書の多くは動詞を導入する際に「マス形」を基本形としているが、動詞分類の判別や活用形を習得していく上で果たしてそれは学習者にやさしい導入法であると言えるのだろうか。

本稿では、初級日本語教育において当たり前のように考えられてきた「マス形」を基本形とする動詞導入法の見直しを試みる。その際、先行研究の知見を参考にしながら、学習者の目線に合わせたより効率的な動詞分類とその導入方法を提案したい。

2. 先行研究

初級レベルにおける動詞の導入方法については大きく二つに分かれる。菊池（2013）で挙げられている〈マス形基本主義〉³と、〈辞書形基本主義〉がそれに当たる。「辞書形」の導入時期をめぐる議論は従来から成されてきた。菊

1 従来の日本語教育では動詞を三つに大別し、国文法における五段活用動詞を「1グループ」、上一段・下一段活用動詞を「2グループ」、カ行・サ行変格活用動詞を「3グループ」に分類している。

2 藤村（2004）は、「動詞分類判別法」に「辞書形」の方が「ます形」より優れている点を動詞の例を挙げて説明している。

3 菊池（2013）による用語である。菊池（2013）は、初級日本語教育における多くの教科書が「マス形」を基本形とし、「語として頭の中に格納するときの基になる形」「文法の活用で、他の形を作るときに基になる形」として教えていると指摘している。

池（1999）は、動詞の活用タイプを識別する際、「マス形」より「辞書形」に拠る方がより効率的であるとし、菊池（2013）では動詞基本形をめぐる攻防において<マス形基本主義>への懸念を述べている。また、菊池（2013）は<辞書形基本主義>を採ることが、「辞書形」とプレインフォームへの習熟を促し、複文をはじめ「日本語を豊かに使うための諸表現」を身につけるための、はるかに有利な道のはずである、と論じている（同論文：84）。

一方、山下・ラープスイサワット（2002）は、初級段階における動詞の導入順序を音声教育の面から考察し、学習者が適切なアクセントの習得を目指すためには「マス形」より先に「辞書形」を導入すべきであると述べている。

このように「辞書形」の導入時期をめぐる議論が成される中で、「辞書形」と「マス形」を同時に導入することの利点を取り上げている研究もある。西元・白川（2005）は、「辞書形」と「マス形」を同時に導入することはリスクを負うもので学習者の負担も大きくなるかもしれないと指摘している。しかし、言語知識として「マス形」が活用の一つで丁寧な話し言葉で使われるものであるということ、最初の段階ではそのスタイルの会話を学習するというを最初から伝えた方がよいと述べている。西元・白川（2005）は、動詞の活用形を考慮しながら「辞書形」と「マス形」を同時に導入することの利点とさらなる可能性を示唆している点で意義がある。

以上のように、日本語教育において動詞の基本形をめぐる議論は長年にわたって成されてきたが、そのほとんどがどの形式を動詞の基本形として導入すべきかに焦点を当てている。動詞の分別方法や活用形を考慮した導入方法に注目している研究は少なく、学習者の目線に合わせた動詞分類やその導入方法について論じている論文は今のところ見当たらない。本稿の目的は、先行研究の知見を参考にしながら、従来の初級日本語教育における「マス形基本主義」の見直しを行うと共に、「辞書形基本主義」の必要性を明示することにある。また、日本語学習歴を持つ日本語教師として、学習者の目線から動詞の分別方法や活用形に基づいた新たな動詞分類とその導入方法を提案したい。

3. 学習者にやさしい動詞分別法

3.1 「マス形」を基本とする動詞分別法

文末における述語の形式を考える時、動詞文は他の文と違って活用形が複雑である。次の例文のように名詞文や形容詞文の場合は非過去を表す場合、もとの形（単語）のまま後ろに「デス」をつけることで丁寧な言い方になるが、動

詞の場合はそうはいかない。例（3）のように、名詞や形容詞と違って動詞の形を変えて丁寧形にする必要がある。

- (1) 私は韓国人です。学生です。
- (2) 日本語は難しいです。でも、面白いです。
- (3) 毎日、学校へ行きます。日本語を勉強します。

従来の初級日本語教科書の多くは動詞を導入する際、「マス形」を固まった形で提示し、「食べます・食べません・食べました・食べませんでした」のように文末でそのまま使える一つの形として教えている⁴。動詞を「マス形」で固定（「食べ」の部分が共通）して教えることで、パターン化されている形式は特に活用形を習得しなくてもすぐに使えるといったメリットがある。

しかし、「辞書形」がわからないと動詞のタイプ分けが難しく、活用形（ナイ形、タイ形、テ形、タ形、連体形、意志形、など）もうまく作れない。また、「～と思います、～そうです、～んです、～ことができます」などの文法形式は、文末は丁寧形であっても前に来る動詞の形は「辞書形」のまま使われるため、「辞書形」の習得が必要となる。

もちろん、動詞の「マス形」から動詞のタイプ分けができないわけではないが、「マス形」を基本形にした場合、五段活用動詞（いわゆる「1グループ」の動詞）と、上一段・下一段活用動詞（いわゆる「2グループ」の動詞）を識別することは容易ではない。つまり、「マス形」を先に習得してしまうと、動詞のグループ分けがうまくできず、動詞の活用形を使いこなすことが難しくなると考えられる。

3.2 「辞書形」を基本形とする動詞分別法

日本語初級レベルにおける動詞の分別法として「マス形」を基本形とする場合、次のような方法で分けることができる⁵。

4 菊池・増田（2009）、菊池（2013）は、主な初級教科書（『みんなの日本語』、『げんき』、『初歩』、『新文化初級日本語』、など）において「マス形」が基本形として扱われている点を指摘し、それによる問題点を詳しく取り上げている。

5 菊池（2022）の「マス形」による動詞識別法を参考。

- imasu → 1グループ：あります、書きます、読みます、話します、など
- ↓ 「上一段」：います、見ます、起きます、降ります、落ちます、など
- emasu → 2グループ：食べます、寝ます、考えます、見えます、など

上記のように単純に形のみを見て考えると、「-imasu」の形を1グループ（五段活用動詞）、「-emasu」の形を2グループ（上一段・下一段活用動詞）に分けることもできそうに見える。しかし、2グループのうち上一段活用動詞（起きる、降りる、借りる、落ちる、見る、いる、など）も「-imasu」の形をとるため、形のみでグループ分けをすることは難しい。つまり、1グループ（五段活用動詞）と2グループのうち上一段活用動詞はいずれも「-imasu」の形をとるため、「マス形」による動詞分別法では上一段活用動詞のすべてを2グループの例外とする必要がある⁶。

その一方、「マス形」ではなく「辞書形」を基本形にする場合は、次のような方法を提示することで、動詞のグループ分けが簡単にできる（②の例外の動詞例は、初中級レベルの動詞で十分である）。

- ① すべての動詞は「ウ」段（末尾が「-u」）で終わる。
- ② 最後が「-iru」か「-eru」で終わる動詞のみが「2グループ」。
例外となる動詞はかなり数が限られる。
例) 「入る、帰る、走る、知る、切る、要る」などは「1グループ」
- ③ 「来る」と「する」は、不規則動詞で「3グループ」。

この動詞分別法を簡単に説明すると、まず①すべての動詞がウ段で終わることを知っていれば、新出語彙であっても動詞か否かがすぐに判断できる。また、②最後が「-iru」か「-eru」で終わる動詞のみが「2グループ」になるので、語尾だけ確認すれば瞬時に動詞のグループ分けが可能である。もちろん、「入る、帰る、走る、知る、切る、要る」などのような例外の動詞もあるが、初中級レベルで使用される動詞リストから考えると、その数は極めて少ない⁷。

6 藤村 (2004) や菊池 (2022) も、「マス形」による動詞識別法の例外動詞について触れている。

7 藤村 (2004) は、『品詞別・A～Dレベル別1万語語彙分類表』（改訂版1998）を基に、旧日本語能力試験の3、4級において例外と言える動詞は11語しかないと述べている。

・レベルD（旧日本語能力試験4級）：帰る、切る、知る、入る、走る [5語]

・レベルC（旧日本語能力試験3級）：要る、しゃべる、すべる、握る、減る、参る [6語]

このように動詞の導入において「辞書形」を基本形とする動詞分別法に従えば、初出の動詞であっても簡単にグループ分けが可能であるが、「マス形」を基本形とする場合は例外が多く、動詞別に動詞のタイプを覚えなさいといけなさいため、学習者に不要な負担をかけることになってしまう。

4. 学習者にやさしい動詞導入順序

4.1 動詞分類の見直し

周知のように、日本語の動詞は活用規則によって3つのタイプに大別される。これまで日本語教育では、国文法における五段活用動詞を1グループ、上一段・下一段活用動詞を2グループ、カ行・サ行変格活用動詞を3グループに分類してきた。上述したように、主に「マス形」を基本形とし、「imasu」の形を1グループ、または例外の2グループとし、「emasu」の形を2グループ、不規則に形が変わる「来る、する」を3グループに分けるのが一般的である。「マス形」を基本形とする動詞分類だとこのようなグループ分けがシンプルで理想的であるように見えるが、動詞の活用に焦点を当てて考えると非常に非効率的であることがわかる。

従来の初級日本語教科書では、動詞の分類を示すとき常に1グループの動詞を先に提示する。3つのグループの中で、1グループが基本となり、動詞の活用を教える時もまず1グループから活用形を示すのが一般的である。つまり、日本語教育における動詞分類は、五段活用動詞の「1グループ」をデフォルトにしているが、学習者にとって動詞の活用形に合わせて末尾を変えるのは容易なことではない。学習者の負担を減らすためには、従来の動詞分類ではなく、動詞の活用形を考慮し、上一段・下一段活用動詞を「1グループ」、五段活用動詞を「2グループ」、カ行・サ行変格活用動詞を「3グループ」に分けた方がより効率的であると思われる。

例えば、動詞の後ろに「ナイ形（未然形）」、または「マス形」をつける時、形を変えず末尾の「ル」だけを取ってそのまま「ナイ形」や「マス形」をつける上一段・下一段活用動詞を「1グループ」にした方が、学習者にとってははるかに分かりやすいはずである。動詞の活用を考慮し動詞分類を行う場合、後ろにつける形式に合わせて形を変えないといけなさい五段活用動詞より、むしろどんな形式をつけても末尾の「ル」だけを取ってそのまま使える上一段・下一段活用動詞の方が「1グループ」に相応しいのではないだろうか。

また、従来の動詞分類との違いを明確にするためには活用方法に合わせて、

上一段・下一段活用動詞を「1段動詞」と称し、五段活用動詞を「5段動詞」、カ行・サ行変格活用動詞を「不規則動詞」と名称を変えた方がより効率的であると思われる。これにより従来の動詞分類との用語による混乱を防ぐことが可能になるだろう。

4.2 学習しやすい動詞導入順序

学習者にやさしい動詞の導入順序を考えると何より重要なのは、動詞の「辞書形」を基本形とし動詞を導入することである。言葉遣いとして普段は丁寧体（「デスマス体」）の「マス形」を使うとしても、動詞の活用形を使って文を産出したり、知らない動詞を辞書で調べたりする時は、どうしても「辞書形」が必要となるはずである。その際に、「辞書形」を動詞の基本形として知っていれば、学習者の負担も軽くなるのが容易に想像できる。その一方で、「マス形」を基本形にして先に習得してしまうと、動詞のタイプ分けがうまくできず、動詞の活用形を使いこなすことが難しくなるだろう。

よって、動詞の導入順序は動詞分類と同様に活用形を考慮する必要があり、それが学習者の負担を減らすことにつながると考えられる。その方法として、まず動詞の「辞書形」を基本形とし、末尾の「ル」だけを取れば形を変えずそのまま使える「1段動詞」を先に導入する。次に、動詞の後ろにつける活用形に合わせて末尾を変えないといけない「5段動詞」を提示する。最後に、活用する時に不規則に形が変わる「不規則動詞」を提示することで、「辞書形」を基本形とする動詞分類とその活用形が覚えやすくなると期待できる。

5. 「辞書形」に基づく動詞の活用形

「マス形」を先に覚えさせて、ある程度「マス形」が定着し、使いこなせるようになってから「辞書形」を導入した方が良いと考える意見もあるだろう。しかし、「辞書形」を教えないまま「マス形」のみを多用して習得させると、学習者は「マス形」が一つの単語である、または「マス形」を動詞の原形であると考えてしまう可能性が高い。そのため、後から「辞書形」を導入しても、すでに「マス形」を動詞の基本形として覚えて使っている学習者には「辞書形」の習得が難しくなると考えられる⁸。それにより、次のような誤用が起

8 菊池（2022）、高（2022）も、動詞の導入において「マス形」を基本形にした場合に起こり得る学習者の誤用について指摘している。

こり得る。

- (4) 私の趣味は映画を見ますことです。
- (5) 私は経済を勉強しますために日本へ来ました。
- (6) 金さんは先週休みましたと思います。

初級日本語教育において、多くの日本語教師が丁寧体である「マス形」を規範的な表現として捉えて「辞書形」は後回しにし、「マス形」のみを固まった形として教えている。しかし、学習者の立場から考えると、動詞の活用形がよりシンプルな「辞書形」を動詞の基本形として知っていれば、活用形の習得にも役立ち、学習者の不要な負担を減らすことにもつながるだろう。

初級レベルではまず丁寧体が使われるため、動詞もすべて「マス形」で提示されるはずである。最初の段階において活用形を教える必要はないが、少なくとも動詞の語彙リストに「辞書形」を明示することで、もとの形が「辞書形」であることを学習者に意識させる必要がある。動詞の活用に触れず、「マス形」が「辞書形」の丁寧な言い方であることに気づかせるだけでも、後に動詞の活用形を導入する時、理解が早まると期待できる。

動詞の活用形を導入する時は、以下のような基本的な情報を与えた上で動詞活用の例を挙げて説明すると、さらに習得しやすくなるだろう。下記の内容については、学習者のレベルに合わせて可能な限りやさしい単語を使い、適宜わかりやすい例を挙げながら説明する必要がある。

- 1) 動詞のもとの形は「辞書形」で、辞書を引く時に使う。
- 2) 動詞は大きく3つのタイプに分けられる。(ここで3.2で上述した「動詞分別法」を説明する)
【1段動詞】、【5段動詞】、【不規則動詞】
- 3) 【1段動詞】は一つの固まった形でしか活用しないが、【5段動詞】は五つの形で活用する。
- 4) 【不規則動詞】は「来る、する」しかないが、活用が不規則であるためそれぞれの活用形を覚えなければならない。

動詞活用の例としては、最も基本的に使われる活用形を取り上げ、各タイプごとに例を挙げて説明すると良い。ここでは、「ナイ形」「マス形」「終止形」

の例を挙げておく。

- ・【1段動詞】の動詞は、末尾の「る」を取って、後ろの形式をそのままつけるだけでよい。
例) 食べる：食べない、食べます、食べる。
起きる：起きない、起きます、起きる。
- ・【5段動詞】の動詞は、末尾の平仮名を基準に、ア段から順番に「ナイ形」「マス形」「終止形 (= 辞書形)」の順で活用する。
例) 行く：行かない、行きます、行く。
読む：読まない、読みます、読む。
- ・【不規則動詞】の「来る、する」は、決まったルールがない。
例) 来る：来ない、来ます、来る。
する：しない、します、する。

また、「テ形」の導入においては「5段動詞」の活用がかなり複雑であるが、次のルールを覚えてもらうことで、「テ形」を使うすべての形式（「～てください」「～でもいい」「～ている／ある」「～ていく／くる」など）を運用することが可能になる。

【1段動詞】

・～る ➡ ～て

【5段動詞】

・～う、つ、る ➡ ～って
・～む、ぶ、ぬ ➡ ～んで
・～す ➡ ～して
・～く (ぐ) ➡ ～いて (いで)

* 「行く」は例外：「行って」になる

【不規則動詞】

・来る ➡ 来て
・する ➡ して

また、「テ形」と同じ活用形を有する形式（「タ形」「タリ形」「タラ形」など）を導入する時も「テ形」の活用を習熟していれば、まとめて覚えることが可能である。

6. おわりに

本稿では先行研究の知見を参考にしながら、初級レベルにおける「マス形基本主義」の見直しと、「辞書形基本主義」の利点について考察を行った。「マス形」を基本形として導入すると、「辞書形」の習得が遅れると共に動詞の活用形がうまく運用できず誤用を起しやすいが、「辞書形」を基本形とすると、動詞分類の判別や活用形が習得しやすくなることが考えられた。また、「辞書形」に基づく動詞分別法の提示や動詞の活用形を考慮した動詞分類を行い、学習者にやさしい動詞の導入順序と提示方法についても提案を試みた。本稿の考察により、「辞書形」を基本形とする動詞活用形の利点と、従来の動詞分類とは異なる新たな動詞分類の可能性を示唆することができた。

今後は初級レベルの学習者を対象に、「辞書形基本主義」の導入による学習効率向上についての裏付けを取っていきたい。

【参考文献】

- 菊池康人 (1999) 「動詞の活用をどう教えるか—日本語教授者のための知識・教授方針の整理—」『東京大学留学生センター紀要』第9号、東京大学留学生センター
- 菊池康人・増田真理子 (2009) 「初級文法教育の現状と課題—『です・ます完全文』をテンプレートとする教育からの転換を—」『日本語学』第9号、明治書院
- 菊池康人 (2013) 「日本語教育の『動詞基本形』をめぐる攻防」『日本語学』第11号、明治書院
- 菊池康人 (2022) 「初級日本語教育の諸問題の連鎖と、それらの一括解決の提案—辞書形をはじめ、プレインフォームへの習熟—」日本語/日本語教育研究会、第14回研究大会講演資料
- 高恩淑 (2022) 「初級日本語教育における「辞書形」導入について—学習者にやさしい動詞分別法とは—」大韓日語日文学会、第68回秋季国際学術大会予稿集
- 西元淳子、白川博之 (2005) 「日本語教育における文法の扱いに関する一提案」『広島大学日本語教育研究』第15号、広島大学大学院教育学研究科日本語教育学講座
- 藤村泰司 (2004) 「動詞分類判別法:「辞書形」法が「ます形」法より優れている一つの理由」『語学プログラム ワーキングペーパー』第14号、国際大学
- 山下好孝、ラーブスイサワット・ニダー (2002) 「日本語初級段階における動詞導入順序とその発音指導」『日本語・国際教育研究紀要』第23号、北海道大学高等教育推進機構国際教育研究部